

米原万里著「打ちのめされるようなすごい本」文春文庫、文藝春秋 2009年5月10日刊を読む

打ちのめされるようなすごい本

1. 中学2年の3学期に帰国して地元の中学校に編入した私は、高校受験用に暗記すべきものとして与えられた文学史に登場する作品を片っ端から読んだ。自分が日本にいなかった5年間に同級生たちは読んだに違いないと焦りまくりながら、『源氏物語』も『好色一代男』も『南総里見八犬伝』も『破戒』も『暗夜行路』も読んだ。ある日、教師が「田山花袋の『蒲団』を読んだ人？」と尋ねて、教室内で手を挙げたのは私一人だったので、日本人は何て謙虚なのだろうと恥じたのだが、後で確かめてみると、本当に彼らは読んでいなかった。文学史に出てくる他のほとんどの作品も読んでいなかった。なのに、作家の名前と作品名と発表年は正確無比に覚えている。この時のショックは大きかった。文学作品が与えてくれる感動を禁欲してデータだけ詰め込むなんて、何と味気ない人生だろうと思う一方で、でも確かに明治になったとたんに日本の小説は退屈で、ワクワクさせるところが少なくなって、読み通すのが忍耐力テストみたいになっているから、彼らの気持ちも理解できた。
2. それ以来、文学史とは縁がないのだが、『座談会 昭和文学史 第一巻』（井上ひさし／小森陽一編著 集英社）は、600頁近い分量、図や写真、資料も豊富で、モノグラフィーだったら、読み終えるのに3日はかかったろうに、座談会という話し言葉のリズムと、多様な見方が交差するポリフォニックな面白さ、予定調和的でない意外性や発見に満ちた展開で、手に取るなりする読み進めた。かつて退屈と思った昭和の作家たちの作品を再読してみようかなという気にさせてくれた。脚注もいちいち読み応えがあって、難なく知識と教養と雑学を増やしたという感じ。
3. 元は雑誌『すばる』の連載で、毎回ホスト役の2人がテーマに応じたゲストと座談した記録を六巻で刊行するその1冊目。
4. 加藤周一がゲストの第一章では、「大正から昭和へ」の時代背景と文学の流れを世界的視野から捉える。教育の普及と文学の商業化を背に関東大震災後に起きた円本ブームについて。ヨーロッパには、円本のような事はなかった。基本的に自国文学中心主義で、ギリシャ、ラテン、シェイクスピアを除くと自国の過去の文学をひたすら読む。フランスの作家でラブレールやモンテーニュを読んでいないなんて考えられない。その代わり、ドフトエフスキーやゴーゴリを知らない。ところが、日本では文学者でもない普通の人々が世界文学全集で他国の名作を読んでいる。その代わり縦が犠牲になった。日本の文学者には本居宣長の主要作品や、『源氏物語』を全文読んでいる人が少ない。
4. 中村真一郎をゲストに「谷崎潤一郎と芥川龍之介」を語った章では、「谷崎は自分の肉体に劣等感を持っていたのでは」という井上の指摘にハッとさせられ、「志賀直哉—『小説の神様』の実像」では、志賀が内村鑑三に惹かれたのは、「美男の内村鑑三」「容貌といい、声の調子といい、非常

に強い感じの内村先生」であって肝心の「説教の内容は全然覚えていない」と思想にではなく人間そのものに多大な興味を抱く志賀の本質を高弟だった阿川弘之が語っていて膝を叩く。小田切秀雄、島村輝がゲストの「プロレタリア文学」では、発足当時の紀伊國屋書店はプロレタリア文学系の雑誌販売に支えられていたという話に驚き、「横光利一と川端康成」の章では川端が「調査とかメモなしには書かない」『雪国』も含め、実録しか書かない作家であったことを娘婿の川端香男里から明かす。とにかく逸話満載。

P196 ~ 198

[コメント]

ロシア語会議通訳・エッセイスト・作家として活躍した米原万里(よねはらまり)先生の最初で最後の書評集。中学 2 年生の時に高校受験用に暗記すべきものとして文学史に登場する作品を片っ端から読んだ結果、米原先生の学力や人格の一部が形成されたのではないかと私には思われてならない。学校の教科書で紹介されている本は学生時代に 1 度、社会に出てからもう 1 度、そして、時間的に自由になったらもう 2 ~ 3 度と、人生において合計 5 ~ 6 回読むことを私はお勧めしたい。学校での勉強は一生かけて行う勉強のよいきっかけと考える。

— 2013 年 9 月 20 日 林 明夫記 —